

コミュニティにおけるウチとソトに着目した心理臨床モデルの構築

竹森 元彦

2024 年

【論文要旨】

本論の目的は、筆者自身のスクールカウンセリングの実践を通して、コミュニティのカウンセラーがもつ「ウチ」と「ソト」を行き来する境界的機能によって、個とコミュニティ全体に関わることによって、そこに生きる人々がもつ本来の力を発揮し相互に助け合えるための心理臨床モデルを構築することである。本論で明らかにしたい点は、次の5点である。

①ウチとソトからみたコミュニティとは何か、②ウチとソトにおけるカウンセラーの境界的機能、③コミュニティに生きる人々がつながり支えあう力を回復するために、カウンセラーはどのように機能するのか（心的機能モデル）、④ウチとソトを繋ぐうえでの「守秘義務」の取り扱い、以上に基づいた、⑤コミュニティにおける心理臨床モデルの概念化である。

第1章は、問題と目的について論じた。コミュニティを「その原初から、その『内部』的な関係性と、『外部』との関係性の両方をもっていることになる」「この“関係性の二重性（ないし、二重性）”にこそ、コミュニティの本質がある」（広井，2009）ととらえた。そして「『ウチ』『ソト』の意識が強く、この感覚が先鋭化してくると、まるで『ウチ』の者以外は人間ではなくなってしまうとおもわれるほどの極端な人間関係のコントラストが、同じ社会にみられるようになる」（中根，1967）。日本人のウチとソトの意識によって、コミュニティはウチとソトに分断されがちである。

「ウチとソト」の概念は、幅広い領域において、日本人の人間関係や社会・文化的特徴を考える上で用いられる鍵概念として論じられてきた。土居（1971）は、「ウチとソト」は、ミウチ、ウチ、ソト・世間、ヨソという同心円状の重構造をなしており、見知らぬ人に対して無視ないしは無遠慮の態度がとられるが、いったんその人が脅威となると精神分析でいう同一化や摂取という防衛機制を働かせる。日本人にとって「世間」（阿部，1995）とは、個人よりも尊重される生活の枠組みである。個人は、世間（ソト）に反した場合、世間から排除されてしまう可能性があると考え。甘（2018）は、日本人は社会ではなく、世間に生きていと述べた。源（1969）は、日本人に見られる「義理と人情」の義理を「暖かい義理」と「冷たい義理」という対極概念に分け、義理は人情に補完される程度の依ってどちらにでもな

るとした。日本の会社や組織において集団の場がつけられるとその場が、個人よりも優先される（中根，1967）として「日本人のウチの認識概念は、『ヨソ者』なしに「ウチの者」だけで何でもやっていけるという、きわめて自己中心的な、自己完結的な見方にたっている」と指摘した。河合（1976）は何よりも「全体としての場」が先に形成され、その場の均衡状態をいかに保つかということが重要となってくる（「場の倫理」）について述べた。木村（1972）は日本的と言われる現象の背後には「人と人との間」（間柄）に主体があることを指摘した。

本論ではウチとソトを次のように定義した。「日本文化にみられる人と人の関係性を支配する価値観であり、日本の近代化に伴った人々の生活様式の変容にあっても今なお日本人の生活及び心性に根付き、日常的な対人関係の持ち方に影響を与えている文化的準拠枠である。また状況や文脈によって、空間的・対人的・心理的な意味を持つ多義的な言葉である」

次に、個と社会をつなぐ心理臨床の考え方として「コミュニティ心理学の視点」（安藤，1989）、「システムとして見る視点」についてとりあげた。下山（2002）は「こころが生理や身体などの生物的側面から切り離されたものではない」、Feldman(1992)は、「個人の心理的力動と対人関係である家族力動は、円環的な循環過程となっている」と述べた。コミュニティにおける心理的支援において、個人を対象とするだけではなく、個人と家族、集団や組織について統合的に考える必要がある。

また、日本のスクールカウンセラー事業の展開とスクールカウンセリングの特徴について論じた。スクールカウンセリングの役割定義の曖昧さ（國分，1996）、複数の相談者から同時に相談受ける多重構造の問題、守秘義務や他職種連携の困難さなどの課題がある。日本のスクールカウンセリングの事例報告の分析では、個と集団へのアプローチ、学校や家族との力動を引き起こす、外部と内部の「境界」としての在り方、その中での家庭訪問や個人療法の活用など、多様な相談に対して様々な工夫を実践していた。また、「ウチとソト」から不登校現象を捉えた場合、学校の「ウチとソト」という分割によって支援構造に難しさがあつた。子どもの抱えた問題を排除することなく、その問題を保護者や学校で一緒に支えていくための協働こそが、新たな教育の姿ではないかと考えた。一方、同心円状にある中心と周辺の境界の領域においては、周辺は異物であり排除の心理機制が働くが、互いを尊重する（対等的・水平的関

係)とき「新たな文化の創造」がある。「協働」とは「対等な立場で対話しながら、責任とリソースを共有してともに活動を計画・実行し、互いにとって利益をもたらすような新しいものを生成していく協力行為である」(宇留田, 2004)。アメリカと北欧(フィンランド)、日本のスクールカウンセラーを比較したところ、日本型コミュニティにおいて、学校と保護者は相互の「ソト」に位置づく。アメリカや北欧が子ども(生徒)と保護者、学校が協働的であるのに比べて、日本のコミュニティの支援体制が脆弱であることがわかった。

第2章, 第3章, 第4章において, 3つの事例を提示して, コミュニティにおけるウチとソトに着目して, カウンセラーが機能的に動きはじめて, 子ども(生徒), 家族, 担任, 学校全体が協働的な関係になっていく過程を「イメージ図」にて示した。第2章においては, [事例A] 生徒と家族, 学校全体を支えたスクールカウンセリングの事例を通して, 生徒や教師の相互作用を介在して学校システム全体へと影響を与えた心理臨床モデルを検討した。事例Aは, 生徒と家族, 学校全体へと影響を与えていく支援モデルである。スクールカウンセラーは, “ウチ”と“ソト”の機能のうち, 特に“ソト”の機能を用いて, “外部の専門家”として機能し始める。同時にスクールカウンセラーは, 担任の話を傾聴してその情報から生徒の持つ心理的問題や悩みの様相を明らかにしながら, 担任と生徒の“内”的世界を共有した。その場合, 担任とスクールカウンセラーの視座は, 心の外界(社会不適応)から心の内界(心理的理解)へと深まった。スクールカウンセラーは“ソト”の機能のベクトルと“内界世界”へのベクトルについて, 同時に両方向へと増幅させていく。そこで<俯瞰的視座>と<内的視座>の均衡を保ちながら, 関係者を巻き込み, 学校生活の場を“治療の場”へと変容させていった。さらに, スクールカウンセラーは, 生徒に直接に接触しながら, 自発的に生徒が来談する形を心掛ける。スクールカウンセラーは, 生徒を軸として, 担任, 保護者, 他の教員などとのネットワークを作り, 生徒(子ども)の心を守る関係者としての〈ヨコの関係〉に位置づけていった。

第3章においては, [事例B] 家出を繰り返す女子中学生とその親へのスクールカウンセリングの事例を通して, 学校内での家族面接を介して, 生徒, 家族, 学校の悪循環に介入する心理支援モデルを検討した。この事例は, 学校の中で家族面接を行う心理臨床モデルである。スクールカウンセラーは, 両親の話を傾聴してその情報から, 生徒の持つ心理的問題や悩みの様相を明らかにしながら, 担任と生徒の内的世界を共有した。両親とスクールカウンセラーの視座は, 心の外界(社会不適応, 家出)から, 心の内界(心理的理解)へと深まった。学校内での「面接構造」は揺らぎやすいが, この時, 生徒, 家庭, 学校をうまくつなぐことで, 不安定に

なりがちな面接の外的枠組みを守ることができた。また、スクールカウンセラーは、学校コミュニティの場に「身」を置くことによる「境界的機能」を活用して、ソトの機能による「高まりと深まり」の視点（垂直的視点と水平的視点）をもつことできた。スクールカウンセラーは、危機状態にある保護者の面接をすると同時に、生徒に接触して正確な心理的理解を得る。そして、学校という場に守られながら生徒と保護者の面接を継続しながら、親子関係や生徒と学校関係者との関係において繰り返されてきた悪循環に介入した。

第4章においては、〔事例C〕ADHDと診断された小1男児と保護者と学校全体を統合的に支援したスクールカウンセリングの事例を通して、学校全体の危機状況に介入する心理臨床モデルを検討した。この事例は、学校全体への危機介入の心理臨床モデルである。スクールカウンセラーは、保護者との面談において親子の絆を深めるように支援を続けた。また、担任の“苦しさ”を丁寧に聴いてねぎらった。次第に、スクールカウンセラーと保護者、担任の視点は、心の外界（社会不適応、家出）から、心の内界（心理的理解）へと深まった。学校という場において、保護者と学校はウチとソトの関係となりがちであるが、スクールカウンセラーの活動によって、3者が同じ場に身を置き、生徒をめぐる対立関係〈タテの関係〉から、生徒について一緒に考えることができる〈ヨコの関係〉を作り出していった。そして〈ヨコの関係〉は、子ども（生徒）－保護者－担任－関係機関による自律的なネットワークにつながった。

第5章において、3つの心理臨床モデルに共通していた支援プロセス及び中核モデルを抽出した。まず、カウンセラーのもつ「境界的機能」によって、学校のソトに位置づく“子ども－保護者”関係と、ウチに位置づく“生徒－担任－学校関係者”関係に直接に同時並行に統合的に関わりながら支援体制がつくられる過程を示した。その機能に基づく学校コミュニティにおける心理支援プロセス及び展開モデル、カウンセラーが境界に位置することによる学校と家庭の協働モデルを示した。また、カウンセリングによる包摂的機能、「問題の設定」という考え方、コミュニティにみられた2つの場の構造について考察した。「守秘」のためには、人々の「現に、目の前で」、「伝える」と「結ぶ」を見せるなどが重要であった。人々が信頼によって結ばれると「守られた空間」として面接の場が機能する。以上のようなコミュニティにおける相談活動によって「共に生きる場」「生かされた体験」がみられた。「見る－見られる」を「見る」という関係性によって、カウンセラーは、心の内と心の外の両面から生徒を理解する場を作り出す。最後に、人々の主体性を尊重する「委ねる」「機が熟するのを待つ」という姿勢を示した。

第6章は、コミュニティにおけるウチとソトに着目した心理臨床モデルの諸理論について、問題の目的で示した目指すべき5点について総合考察を行った。

①ウチとソトからみたコミュニティとは何か。

あらためて「機能するコミュニティとは何か」について論じた。日本型コミュニティと、本事例にみられた「機能するコミュニティ」の構造について対比的に示した。これら二つの構造は「反転」する可能性を持つと考えられた。反転のためには、コミュニティの場における「いま、ここ」において、人々の「現に、目の前で」カウンセラーが共に生きることを「見せる」ことが重要である。生きた言葉によって、生きた空間が機能し始めたとき「いま、ここ」に人々の視点が集約される。

②ウチとソトにおけるカウンセラーの境界的機能について、コミュニティに生きる人々のつながり支えあう力を回復するために、カウンセラーはどのように機能するのか。

まず、コミュニティにおけるカウンセラーは境界に「身」を置くことによって「分裂」したような状態におかれるが、場に「身」を置くとき、その場の空間に対して「垂直的視点」と「水平的視点」を拡げることができる（イート・トゥアン, 1993）。そのような二つの視点によってコミュニティに身を置くカウンセラーにはコミュニティの「全体を俯瞰」しながら「心の内」を取り扱い人々と関わる事ができた。「境界の機能」としての「反転」につなげていく。

③コミュニティに生きる人々がつながり支えあう力を回復するために、カウンセラーはどのように機能するのか（心的機能モデル）。

カウンセラーの「問題の設定」によって、人々の「排除」から「包摂」へとってかわる力（場のポテンシャル）を引き出していく。土居（1971）の「同心円状」によるコミュニティ構造と、木村（1972）の「人と人の間（間柄）」によるコミュニティ構造の図を対比して示した。同心円状のコミュニティ構造はウチとソトの関係性によるウチの安定性を得るが排除が生じやすい。人と人の間（間柄）のコミュニティ構造は間に空間があり、「縁^{えん・ふち}」と「縁^{えん・ふち}」をつなげて包摂的な関係性へと場を反転させるポテンシャルを持っている。それら二つは「表裏」の関係にある。コミュニティにおける心理臨床は、「問題」をその「場」のソトにおくのではなく、人と人との間に「生きる営み」として持ち込むことである。

④「ウチとソトを繋ぐ上での『守秘義務』の取り扱い」について、「秘密」（小此木, 1986）の伝え方として、日本文化にみられる「包む」と「結ぶ」（額田, 1972、1977）というメタファーによって説明をした。すなわち、「秘密」を丁寧に受け取り、丁寧に「包み」、それを「伝える」ことで、人と人の縁を「結ぶ」ことができる。コミュニティにおける「秘密」の取扱いは、このような日本文化にみられる心的プロセスをたどると考えた。

⑤「コミュニティにおける心理臨床モデルの概念化」について。

コミュニティにおけるカウンセリングは、個人心理療法とは異なる難しさがあったが、コミュニティにおけるカウンセラーが「身」を置くことによってカウンセラーの境界的機能によって「包摂的な関係」へと変容させるプロセスが見られた。その変容に関わる重要な論点についてまとめた。

終章においては、本研究の課題と展望として、6点について述べた。教育領域におけるさらなる検討と多領域への適応、カウンセラーに課せられた社会的責任（心と環境の相互作用から考える視点）、カウンセラーとしての居る場としての「空」の概念、日本独自の心理臨床の重要性、「守秘」の取り扱いを身につけることの難しさ、多職種連携による専門家の育ち、コミュニティにおけるカウンセラーの教育（養成）と方法論の開発についてである。